都小特活
第104号
東京都小学校特別活動研究会
平成31年3月発行
発行人
赤羽根　智

◎平成30年度◎

東京都小学校特別活動研究会

研究発表大会

平成30年度東京都小学校特別活動研究会の研究大会が、去る2月22日(金)に東久留米市立第二小学校を会場として開催された。本研究会では、「自己有用感を高める望ましい集団活動」を研究主題に研究を進めてきた。今年度はその3年目として、研究の基調報告を受け、学級活動部、児童会活動部、クラブ活動部、学校行事部の4つの活動部会が研究を進めてきた。

研究発表大会の概要は、次の通りである。

活気にあふれた研究発表大会

年度末の多用の中にもかかわらず、全国各地から約200名を超す方にご参会いただいた。学習指導要領のキーワードである「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」の育成に向けて、特別活動が担う役割への期待の大きさを感じられる大会となった。

会長　赤羽根　智
（東久留米市立第二小学校長）

大会は、開会のことばに続き、赤羽根会長から次のような挨拶があった。

はじめに、本大会に北は北海道、南は長崎などからたくさんの参会者があったことが報告された。本研究主題での研究も3年目であり、まとめの年度となった。各部が、「なすことによって学ぶ」という特別活動の基本に立ち返って研究がなされ、その成果が本日発表されることに大きな意義がある。世界が急激に変化する中、未来を担う子供たちを育てるという大きな責務をおっている教育者として、不易と流行を見極め、迅速に判断し、実行していかなくてはならない。この点からも本日の講師の安倍恭子先生の講演から学ぶことも多い。また、日頃より支援していただいている都ならびに各市区町村教育委員会、講師を務めてくださった先生方、各研究団体の代表を務めている諸先生方に対して感謝の意を伝え、挨拶を結んだ。

続いて、ご多用の中ご列席いただいた来賓・顧問の先生方がご紹介された後、佐野研究部長より研究基調報告がされた。その後、に続き、各活動部がそれぞれの創意工夫を凝らして1年間の研究内容や成果・課題の発表を行った。（詳細は、2・3ページ参照）

最後に、指導講評を文部科学省初等中等教育局教科調査官　安倍恭子先生から指導講評と『新学習指導要領の実施に向けて』との演題で講演いただいた。来年度実施される学習指導要領のポイントや指導の充実に向けた多くのご示唆をいただいた。（詳細は、4ページ参照）

研究発表大会次第

進行　庶務部長　伊藤幸一

（1）開会の言葉　　副会長　木田明男

（2）あいさつ　　会長　赤羽根　智

（3）来賓あいさつ・紹介

（4）基調報告　　研究部長　佐野　匡

（5）研究発表　　司会　研究副部長　氣田眞由実

○学級活動部

『もち味を生かし、互いに認め合い、高め合う学級活動』

○児童会活動部

『互いを認め合う異学年交流を深める児童会活動』

○クラブ活動部

『個性を発揮し、互いに認め合うクラブ活動』

○学校行事部

『自分のよさや役割に気付き、互いに高め合い、活かし合う学校行事』

（6）記念講演

『自己有用感を高める特別活動の実践
～学習指導要領の確実な実施のために～』
文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官
安倍恭子先生

（7）閉会のことば　　副会長　小島みつる

◎学級活動部◎

『もち味を生かし、互いに認め合い、高め合う学級活動』

1　発表者

矢部織生教　諭（港区立白金小）
神山卓也教　諭（練馬区立北町小）
木﨑清子主任教諭（江戸川区立本一色小）

2　研究発表

（1）研究内容

自己有用感を高めるためには学級活動を通して「一人一人がもち味を生かして活躍できること」や「仲間から必要とされていること」、「自分が役に立っていることを実感できること」が必要である。自己有用感を高めるための可視化や振り返りに視点を当て、研究主題「もち味を生かし、互いに認め合い高め合う学級活動」とし、手だての検証を行った。

（2）手だての具体例

○児童の実態（自己有用感、もち味を含む）を数値化して把握するための質問紙調査
・実態把握のための質問紙調査の作成と活用
○自己有用感を高めるための可視化の工夫
・自分たちで学級会を創り上げる要素カード
・一連の活動における可視化
・ＩＣＴの活用
○互いに認め合い高め合うための活動の工夫
・計画委員会／学級会ノート／振り返りの充実
・適切な中途助言と丁寧な終末の助言
・学級全員が納得する合意形成

3　研究の成果と今後の課題

〈成　果〉

○本活動部で整理した、発達段階による「とらえておきたい『学級会』の観点」を活用し、児童の実態把握の方法を工夫したことで、児童の自己有用感やもち味を数値化し把握するなど、手だてや評価の改善がすすめられた。
○児童の実態把握の質問紙の作成・数値化・分析・結果の活用・変容把握などの方法について、授業実践を通して検証し、手だての有効性が明確になった。

〈課　題〉

○児童の実態把握の質問紙の作成・数値化・分析・結果の活用・変容把握などの方法について、誰でも活用できるように、より簡単な仕組みにしていく必要がある。

◎児童会活動部◎

『互いを認め合う異年齢交流を深める児童会活動』

1　発表者

渋井洋子指導教諭（東久留米市立南町小）
丹治良太教　諭（葛飾区立南奥戸小）
鬼木雅人主任教諭（東久留米市立第二小）

2　研究発表

（1）研究内容

児童会活動における自己有用感を「自分は必要とされている」「自分は役に立っている」と思える感情と定義し、それは他者に認められてはじめて得られるものであると考えた。

その中で児童の自己有用感を高めるためには、「あこがれ」や「思いやり」の気持ちを可視化して伝えることや、場の設定を工夫することが必要である。

「あこがれ」と「思いやり」のスパイラルを意識した異年齢交流を積み重ねることで、自己有用感が育ち、高まり、よりよい人間関係を築くことができると考えた。

（2）研究の視点

①自己有用感につながる「あこがれ」と「思いやり」の可視化を工夫する。
・「メッセージボード」の振り返りの視点の見直しと明確化（相互評価）
・「メッセージボード」の継続と手だての有効性の検証（深化）
②学校全体で異年齢交流を組織的に取り組み、活動を広める。（汎用性のある活動）

（3）検証授業

葛飾区立南奥戸小学校・給食委員会
東久留米市立第二小学校・集会委員会

3　研究の成果と今後の課題

〈成　果〉

視点を明確にしたメッセージボードを活用し、フロアー側からリーダー側へ、リーダー側からフロアー側へ「あこがれ」と「思いやり」を可視化することを通して、相手意識が育ち、自己有用感の高まりやさらなる活動への意欲につながることが明確になった。

〈課　題〉

メッセージボードの活用が継続、発展していくように、定期的に活用の意義や目的を確認したり、啓発する活動を行ったりしていく必要がある。基本的な代表委員会や委員会活動の在り方（「児童の発意・発想を生かした活動」の場を保障すること、「計画」から「振り返り」までの活動を一連の活動としてとらえること）についてさらに見直し、より多くの学校に広めていく。

◎クラブ活動部◎

『個性を発揮し、認め合うクラブ活動』

1　発表者

髙　橋　信　行　主任教諭（足立区立千寿第八小）
山　口　哲　郎　教　　諭（葛飾区立本田小）
中　本　健太郎　主任教諭（江戸川区立第四葛西小）
島　田　泰　子　教　　諭（墨田区立曳舟小）
加　藤　葉　子　教　　諭（江戸川区立大杉小）

2　研究発表

（1）研究内容

クラブ活動は、異年齢集団活動の楽しさを味わい自分たちの手で活動を作り出すための方法の理解や力の習得、人間関係をよりよく構築していくための相手を意識した思考力、多様な仲間の個性を受け入れ助け合ったり協力しあったりしてよりよい人間関係を築こうとする態度といった資質・能力を育てる。

３年間の研究では、多様な「仲間のよいところ見付け」の方法で、クラブの仲間のよさに気付くことができるような手だてを講じ、児童の人間関係に深まりが見られた。手だての有効性の検証では、クラブカードや作文等の個々の記録を、経過を追って比較したり他の児童と見比べたりしながら分析することで、児童の変容を捉え、指導の充実へとつなげた。

まとめの年となる今年度は、毎時間及び年間の活動がよりよく展開されるよう指導の充実と、「同好の仲間が集まる集団活動」というクラブ活動の基礎的な特質に立ち返り、児童が興味関心を追求することができるようにするための手だてを、実践を通して検証した。

視点１　可視化の工夫
…活動計画カードやクラブ掲示板の活用

視点２　認め合う振り返り
…クラブ通信の活用や多様なよいところ見付けの実践

視点３　手だての有効性検証
…記録物の分析と指導改善

視点４　組織的な取り組み
…一斉オリエンテーションの実施や教育計画への明記

（2）研究授業

葛飾区立本田小学校　　劇クラブ
江戸川区立第四葛西小学校　生き物研究クラブ

3　研究の成果と今後の課題

〈成　果〉

①個の変容を見取り、自己有用感の高まりを把握し、児童一人一人への指導や助言に生かすことができた。
②「よいところ見付け」について、様々な手だてを講じることで、児童の人間関係が深まり、よいところ見付けの視点を広げることができた。
③クラブ活動計画カードを活用したことで、児童の力で工夫して活動を創り上げられるようになった。

〈課　題〉

①学習指導要領の「目指す資質・能力」に沿って、指導の手だてや評価規準を見直し、指導の充実や、指導と評価の一体化を図っていく。
②異年齢集団活動を通して、児童がよりよい人間関係をさらに深めながら、共通の興味関心の追求のための指導方法を研究する。

◎学校行事部◎

『自分のよさや役割に気付き、互いに認め合い、活かし合う学校行事の工夫』

1　発表者

中　西　くみ子　主任教諭（北区立田端小）
兼　古　勇　祐　主任教諭（江東区立有明西学園）
四　本　真　美　主任教諭（大田区立嶺町小）

2　研究発表

（1）研究内容

研究主題の実現に向け、互いのよさや役割に気付き、認め合い、活かし合う学校行事の工夫を研究内容とした。

（2）研究授業

事例１　健康安全・体育的行事
〔運動会の事後指導〕……１年

事例２　文化的行事
〔こどもまつりの事後指導〕……２年

（3）研究の視点

視点①　行事のつながりの中で、活動の見通しや自分の目標をもつことができる指導の工夫

視点②　自己有用感を感じられる振り返りの場や観点の工夫

視点③　自己有用感を高めるための可視化の工夫と活用

視点④　学校全体での組織的な取り組みの工夫

3　研究の成果と今後の課題

〈成　果〉

○自分の成長や課題をつかみ、次の行事につなげることができる事前事後指導の実施や、活動の中に様々な話合い活動を取り入れることなどにより、主体的に学校行事に取り組ませることができた。
○カード類や掲示物の工夫、他学年とのメッセージ交換などにより、互いのがんばりを認め合うことができ「自己有用感」につながった。

〈課　題〉

○学校行事は、学校全体で共通の視点をもって取り組むことの大切さや、三年間での研究で得た様々な「自己有用感」を高めるための手だてをより広く発信していく。

都小特活研究発表大会記念講演

講　演／「自己有用感を高める特別活動の実践
～学習指導要領の確実な実践のために～」

講　師／文部科学省初等中等教育局　教育課程課
教科調査官　安　倍　恭　子　先生

1　はじめに

研究テーマ「自己有用感を高める望ましい集団活動」は、今年で３年目、まとめの年と言っている。サブテーマが昨年度と変わり、「～学習指導要領の確実な実践のために～」と、見直されている。全く同じではなく、今までの取り組みを踏まえて最後の１年間をどうするかを考えているのではないだろうか。

2　研究発表から

学級活動部会においても主題は同じだが、視点を変えている。学級活動は、特別活動の中でも基盤となるものである。どういう力を児童に付けさせたいのか、明確にする必要がある。ただ話し合って、ただ実践しても、力にはならない。特に自己有用感を付けるためにどうしたらよいのかを考えて研究を進めていることが分かる。

児童会活動部のキーワードは、やはり異年齢交流である。交流を通して、いかに効果的に児童の力を高めていくのかが大切である。児童会活動を通して上級生としての意識をもち、また下級生は憧れの気持ちや尊敬の気持ちをもっていく。単に高学年だけがやるものではなく、１～６年までが児童会のメンバーであるという意識をもって取り組む研究をしたということが分かる。学校全体で組織的に異年齢交流に取り組むことが特に大切である。

クラブ活動は、全国的にも回数が減っていて厳しい状況である。小学校でやることが増えてきて、「クラブ活動を減らそう」と決めた学校も多いのではないだろうか。だからこそ、少ない回数で充実した活動を目指す必要がある。学校として、クラブで付ける力を明確にして行わなくてはならない。子ども達が、自分達で自発的・自治的クラブ活動にすることが求められる。

学校行事は、学校の文化のもとであり、特色ある学校づくりの基盤である。５つの行事があるが、本当にその行事に当てはまるのか見直す必要もある。指導計画のない中での行事には意味がない。行事はどのようなことをねらいとして、どのような意義があるのかを、まず教員が理解し、子どもに伝える必要がある。そして、子どもが行事の意味を理解した上で、「どうがんばるのか」目標設定をさせます。事前から事後までの一連の流れが行事である。大切なのは、どの学校も同じようにはできないということである。学校の実態によって取り入れられるものは何かを考えるべきだ。

3　自己有用感と自尊感情

さて、「自己有用感」という言葉が出てきたが、「自尊感情」とは何が違うのであろうか。まず「自尊感情」とは、心理学用語でセルフ・エスティームのことである。「自己肯定感」「自己存在感」などと同じ意味で、自分に対する自己評価のことである。「自己有用感」は、「人の役に立てた」「他人に喜んでもらえた」という自分に対する他者からの評価で、他者との関わりの中からしか生まれてこないものだ。「学校のため」「クラスのために」と、相手意識をもつことから始まる。自己有用感の獲得は、自尊感情の高まりにつながる。しかし、自尊感情が高いからといって、必ずしも自己有用感が高いとは限らない。自尊感情だけ高いということは、単にわがままであるということと紙一重である。豊かな関わりを通して、自己有用感を高め、健全な自尊感情を育てていく必要がある。現代の子どもは「どうせ僕なんか…」と自尊感情が低い子どもが非常に多い。だからこそ、「誰かのためにがんばってよかった」と思える機会を増やすことが重要である。そのために、特別活動が基盤となるのである。

4　特別活動において育成を目指す資質・能力

特別活動で育成を目指す資質・能力は、学校生活の基盤になる力である。これは、学習指導要領の改訂に関わるワーキンググループに示されている。この先の中学校、高等学校、職場や家庭につながっていく、実生活で生かせる汎用的な能力である。

改訂した学習指導要領では、どの教科においても見方・考え方をはたらかせて資質・能力を育てることがポイントになっている。特別活動では、集団・社会の形成者としての見方・考え方をはたらかせなければならない。例えば学級会では、「自分がやりたいから」という考えではなく「みんなにとって必要かどうか」を考えなければならない。集団としての高まりがどうみられるか、自己の生活がどう改善されたかということを意識して指導にあたっていただきたい。特に「学びに向かう力」を育てる文言の中には「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」という特別活動で大事な言葉が全て明記されている。この力が、将来へとつながっていくことを意識していくことが重要である。

学級活動を基盤にしつつ、児童会活動、クラブ活動、学校行事ではどんな資質・能力を育んでいくのかを学校として考えることが大切である。それぞれの活動はばらばらではない。議題は、活動の一部を考えることではなく、事前から事後までの一連の流れを含むのである。「○○をしよう」などがよいと思われる。実践だけが大事なのではなく、振り返りを次に活かすことが大切である。

5　特別活動における「主体的・対話的で深い学び」

特別活動における「主体的」とは、課題を明らかにし、どうしたら解決できるかを子供達自身が考えていくことである。「対話的」は、もちろん話合いが基盤である。交流や自然体験でも学ぶことができる。「深い学び」は、この学習過程を何度も繰り返すことである。議題は違っても、話合いの進め方やよりよい合意形成の力を身に付け、協力して実践していくことが大切である。

特別活動の学びが、教科指導に生きていると意識して指導することが大切である。例えば、理由や根拠を明らかにしながら意見を述べる力や、友達の考えと繋げて自分の考えをもつ力のことだ。普段の授業でそのような姿が見られたときに、教師は「学級会の力が生きているね」「話合いの力が伸びているね」と価値付けることが、自己有用感を高めることにつながる。

6　学級活動における自発的・自治的活動を中心として学級経営の充実を図る

今回、中学校の学習指導要領総則に「学級経営」という言葉が入った。やはり、学級経営が学校生活の基盤である。そしてそれは、教師と子供、または子供同士のよりよい人間関係からなるものである。特別活動で、自発的・自治的活動であることを意識させることが、学級経営の基盤をつくり、学びに向かう力をもつ集団を作り出す。

実施状況調査における今の子供達の課題は、自治的能力の低さです。分析結果のまとめにあるように、特別活動の指導に力を入れている教師のいる学級の児童は、学力が高いということが証明されている。特別活動は学力向上につながる。多様な集団活動を通して互いのよさを見付けたり、違いを尊重し合ったり、仲良くしたり、信頼し合ったりできる、集団活動を目指していくことが重要である。自己有用感を高めるためには、集団活動の場や機会の充実を図り、「がんばってよかった。」「○○さんのここがよかった。」という児童の言葉を増やしていきましょう。そして前向きに、自分らしく生きていってほしい。これは、一朝一夕でできることではなく、学校全体としての積み重ねが大切になってくる。

7　おわりに

子ども達の笑顔溢れる学級・学校生活を、子どもと共につくっていきましょう。そして、学校が一体となって特別活動を進めていきましょう。

編　集　後　記

会報104号をお届けします。校務ご多用のところ、ご協力いただきありがとうございました。

（編集部：石田、篠、大野、藤井、酒井、仕道）